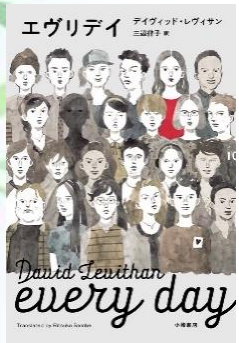
～洛西からの一読～

## 今回のテーマは「出会い」

だれかとだれかが出会って，始まる物語がある。
ささやかな出会いが，大きな意味をもつこともある。
どうか，その出会いが幸せなものでありますように。




### エヴリデイ

デイヴィッド・レヴィサン／作　三辺 律子／訳　小峰書店

肉体をもたず，名前もない。親と呼べるものもいない。毎日だれかのからだに宿り，一日だけその人を生きる。その人の人生を変えないよう，自分の痕跡を残さないようにして。どれだけ望んでも同じからだには一日しか留まれず，今日から続く明日というものもなかった。

けれど，君と出会った。もう一度，いや何度でも「私」として君に会いたい。君に「私」を知ってほしい―。

『エヴリデイ』というタイトルと，たくさんの人間が並んだ表紙の絵。そして，ページを開くと目に入る「〇〇〇〇日目」という日数。読み進めると，それらのもつ意味がはっきりとわかってきます。

主人公は毎日姿を変えます。性別も生い立ちもまったく違う人間へと，入り込みます。時には人種差別や経済格差の問題，多様な性のあり方も垣間見えます。

不思議な物語ではありますが，ふたりの出会いを通して，その人がその人たる所以とは何か，ひとりの人物を作り上げる要素とは何か，深く考えさせられる内容です。

### タフィー

サラ・クロッサン／作　三辺 律子／訳　岩波書店

アリソンの顔には，火傷のあとがあります。それは，虐待のあとです。生まれて間もなく母親を亡くし，父親から虐待を受けながら育ったアリソン。苦しみながらも父親からの愛を信じ続けていたアリソンでしたが，心許せた父親の恋人ケリーアンがふたりのもとを去ったことで，自分も家を出る決心をします。

家出をしたアリソンが，たまたま行き着いた家。そこには，認知症を患うマーラという老女が住んでいました。マーラは，アリソンのことを古い友人タフィーと思い込みます。行くあてのないアリソンは，タフィーとしてその家にとどまることにします。ヘルパーの女性やマーラの息子がやって来る時は姿を隠しながら，アリソンはマーラと奇妙な共同生活を送るのでした。

海外のヤングアダルト文学で最近盛んな詩形式で，「虐待」「認知症」という現代の大きなテーマを内包しながら，アリソンの視点からのみ書かれた作品です。

「ふたりは末永く仲良く暮らしました」という話ではありません。ふたりには，別れの時が来ます。しかしそれでも，たとえ再会は望めなくても，いつか忘れてしまったとしても，この時にこのふたりが出会えて本当に良かったと思える，そんな物語です。